

外国籍県民かながわ会議（第13期・第6回） 議事録

開催日：2025（令和7）年11月2日（日曜日）
場所：かながわ県民センター3階 301会議室

1 開会（事務局）

会議のルール、会議の録音、欠席者及び配布資料等について説明した。
また、新しい委員、今期の委員の紹介をした。

2 全体会議

(1) 新しい委員による提言構想メモの発表について

資料2に沿って、李委員が提言の趣旨を説明した。
李委員には生活向上部会に入ってもらい、議論を進めていく。

(2) 今日の議題について

（柳委員長）

- 提言の整理とかながわ国際施策推進懇話会との連携について考えたい。
次回以降、専門的な先生の課題感を聞きながら提言の作成に取り掛かるため、知りたい内容や話を伺いたい先生の案を考えてほしい。
- 今期の懇話会のテーマは、多文化共生社会の推進に向けた情報発信である。県民会議では当事者目線からの発信について議論しているが、懇話会ではマイノリティだけでなく、マジョリティへの発信を含め幅広い範囲での情報発信について議論している。

(3) 部会別協議（情報部会）

ア 次回の会議でお話を伺いたい先生について

（オオシロ副委員長）

- 前回の部会では、教育と防災・生活に分けた。
- 教育の情報発信について、やさしい日本語などで外国人の親に簡単に伝える方法の参考に、親と関わるNPO団体にヒアリングするとよい。
- 親世代について知見を有する、菊池先生、藤浪先生にお話を伺いたい。

- ・ 箱根町では外国人が増えているため、小川先生にも伺えたらよい。
(モラレス委員)
- ・ 小川先生には箱根町で外国人が増えている現状について伺いたい。
(ストービー委員)
- ・ 箱根町の外国人人口が増えていることから、小川先生に伺いたい。また、菊池先生から教育・災害に関する話を伺いたい。
(オオシロ委員)
- ・ 市民参加協力を携わっている稲垣先生にも話を伺えたら嬉しい。
- ・ 部会としては、藤浪先生、菊池先生、小川先生、稲垣先生に伺いたい。

イ 提言構想メモについて

- ・ (オオシロ副委員長)
今回は防災に関する内容を議論したい。
- ・ (ストービー委員)
自身が日本に来た時、防災についての報道など何も分からなかった。
- ・ (蔣委員)
11言語で情報発信を行っているものもある。
- ・ 地域によっては各家庭に情報誌を投函することがある。
- ・ (モラレス委員)
SNSの情報発信も大切である。
- ・ (蔣委員)
多言語化した情報を市町村が届けることは少なく、役所に配架され、必要だと思ふ人へのみ情報が届く仕組みである。言語が分からない外国人にとって、情報を得ることは難しい。また、様々な多言語情報があっても、自分には関係がないと思ってしまう人が多い。
- ・ (オオシロ副委員長)
効果的な情報発信の方法について委員で考えることは出来るが、限界がある。現実的に可能な情報発信かが分からないところが難しい。
- ・ (モラレス委員)
若い人の視点を知りたい。世代によって扱う発信の媒体が異なる。
- ・ (オオシロ副委員長)
紙による情報発信をなくすことは出来ない。なくなると困る人もいる。

(モラレス委員)

- ・ 世代ごとに活用している情報発信媒体を知ることが出来れば良い。

(松村委員)

- ・ 今は、テレビがない人も多い。別の媒体で情報を得ることが多い。

(オオシロ副委員長)

- ・ 情報発信の周知やPR等を専門にしている方から話を聞きたい。

(事務局)

- ・ 各先生には、提言をベースに、専門的な知見を提供いただく。世代ごとの媒体の活用については、調べて分かることかもしれない。

(モラレス委員)

- ・ 回目の会議までに各自で勉強出来たら良い。

(オオシロ副委員長)

- ・ 提言については、後日グループ内でもやりとりして考えたい。

(蔣委員)

- ・ 生活オリエンテーションについては、内容や実施場所も考えられるとよい。日本語講座のなかに含めると一番実施しやすい。既に取組がある
とくでいぎのうじっしゅうせいがい たいしゅう にほんごがっこう がくせい
特定技能実習生以外を対象にできるとよい。また、日本語学校の学生や、
りゅうがくせいがい ひと にほんご べんきょう ば せんたくし ぎろん
留学生以外の人が日本語を勉強する場の選択肢についても議論したい。

(オオシロ副委員長)

- ・ 防災・生活ともに一定の情報を伝えられるガイドブックがあるとよい。

(モラレス委員)

- ・ 既存のガイドブックを調べて、掲載場所をまとめるとよい。例えば、QR
コードなどを記載し、一枚で情報のありかが分かるようにするなど。

(ストービー委員)

- ・ 生活オリエンテーションは市町村によって異なるため、ベースとなる
ないよう さくせい
内容を作成したらよい。

(事務局)

- ・ 県が日本語講座に含める場合もあれば、各市町村が行う場合もある。
けん がどこまでフォローするかという話にもなるが、全般的な内容は県で、
こま ないよう しちょうそん じっし ていげん か の う
細かい内容を市町村で実施するように提言することは可能かもしれない。

(蔣委員)

- ・ 私たち 13期のメンバーでコミュニティをつくるのがよいのではないかな。

むづか めん じょうほうはっしん いいん おこな かのう
難しい面もあるが、情報発信を委員で行うことも可能ではないか。

(事務局)

- ・ 同じ外国籍の立場である県民会議の方が情報発信すれば、情報を見た
いと興味を持ってもらえるかもしれない。

(蔣 委員)

- ・ 災害時の対応や多言語情報の提供について知れるとよい。
- ・ 外国人は助けてもらおうという立場ではなく、一緒に避難所を運営できる
とよいという意識を、生活オリエンテーションのなかで伝えられるとよい。

(ストービー 委員)

- ・ 多言語化されていない地域もある。自分の地域の情報を知れるとよい。

(蔣 委員)

- ・ 情報自体は色々と発信されているが、知ることが出来ない。国際交流
ラウンジなどに情報があることは、初めて来た方は知らない人も多い。

(事務局)

- ・ 今日のまとめとして、生活オリエンテーションについては、市町村共通
の内容は県で、市町村に応じた内容は市町村で実施するよう働きかける
という方向で検討する。情報提供については、オンラインと紙での発信
や、委員が主体となった発信を検討する。災害情報については、生活オ
リエンテーションの中で提供できるとよい。

(4) 部会別協議 (生活向上部会)

(柳委員長)

- ・ 教育については、提言を一つにまとめることが出来たら良い。
- ・ 倉橋委員の提言については、12期と内容を照らし合わせて考える。
- ・ 王委員の提言については、県と国に出す内容の整理をしたい。

ア 韓委員の提言構想メモについて

(韓委員)

- ・ 災害時のネットワークについて、国籍ごとの自治会との繋がりが大切。
県や本国との日常的なネットワークがあることで災害時に機能する。
熊本地震の時にボランティア経験がある。今回の提言はバックアップの
考え方。海外で資金や物資が集まっても、届け先が明確ではない。

(事務局)

- ・ 大規模災害が起きた時には、県とかながわ国際交流財団で災害多言語支援センターを立ち上げる。

(韓委員)

- ・ 海外からの物資等も受け付けているのか。

(事務局)

- ・ それは大使館等が行っている。

(韓委員)

- ・ 例えば、東日本大震災のときのように、災害が起きた際、海外の民間が資金を集め、支援しようとする動きがある。基本は赤十字であるが、スピード感を考えると必要な所に渡せる組織がない。提言では、関係団体が集まれる場の提供について考えられたらよい。

(柳委員長)

- ・ 海外からの支援の受入れについては、現在話にあがっているのか。

(事務局)

- ・ 備蓄場所はわからない。支援物資は赤十字が流通させるという印象。

(韓委員)

- ・ 政府組織は作られるまでに時間がかかる。災害は、起きてからの2週間が大事。情報がすぐに伝わる世の中であり、海外からの支援は簡単であるが、支援物資の受取体制に課題に感じる。

- ・ 県民会議のように、会を運営する余力があるのかという話もある。

(事務局)

- ・ くらしま安全防災局に、外国籍県民だけでなく、高齢者や要介護者を含む要配慮者という観点から聞いてみてもよいかもしれない。

(柳委員長)

- ・ 観光客への目線は災害の方針に載っているが、在住者への支援が薄いように感じている。

(韓委員)

- ・ それが課題。外国籍県民には、国籍関係なく各自治体の市町村が支援を行っている。その仕組み自体はすでに組織化されており問題ないが、その際に言語が分からないなど、現場レベルでの課題がある。この課題に対してではなく、海外から物資が来た時にどうするかの特化する。

- ・ 組織の代表者や副代表者、企業を会議のメンバーとして集めることで、ネットワークの強化を図れるのではないかな。

(李委員)

- ・ 私が知っている組織に、中国の民間防災組織がある。例えば、2008年の地震の時には、民間の組織から現場に向かった話もある。

(韓委員)

- ・ 今回は海外との繋がりを持つ組織のネットワークを意図している。

(柳委員長)

- ・ 災害の担当課等にヒアリング可能か聞いてほしい。コロナの時に海外から県に物資が届いた際には、コロナ対策の部署に行き渡る体制が整っていた。他県から物資が届いた場合の対応も含めて確認出来たらよい。

(韓委員)

- ・ ボランティア受入れのノウハウはある。初期対応のスピード感が課題。

イ 李委員・バ委員の提言構想メモについて

(柳委員長)

- ・ 外国人の心理互助会に関する内容は、懇話会の中でも話が上がっていた。現在、どれぐらいの外国人が心理的な部分で病院にかかっているか、相談しているかの現状が分からない状態だと思われる。

- ・ MIC かながわ等ではメンタルの相談がどれぐらい来ているか。

(事務局)

- ・ 外国人相談や多言語支援センターでは、メンタルの相談が少なかったように思われる。メンタルケアよりも病院に行きたいという相談が多い。

(李委員)

- ・ NPO法人ABC ジャパンの取組に、外国人向けのメンタルヘルスのカウンセリングがある。

(柳委員長)

- ・ 12期の際、ナタリアさんもメンタルの提言を行っていた。MIC の医療通訳の活動をしていて、依頼者が病院に行く理由はメンタルではないが、待ちでの話はメンタルに関わることが多いという話を聞いた。

- ・ 通訳者のメンタルがしんどい依頼者の話があることも聞いた。現在、一番近い活動は MIC かながわかと思ったが、さほど相談がなければ、

外国人の支援団体のなかで、そのような話がどれだけ聞いているのかを知ることができると思います。

(韓委員)

- 言語の問題もあると思うが、言語の問題以前のメンタルヘルスケアに注目する対応か、各国語に対応できるメンタルヘルスの自助グループのような団体を作ることを促進する対応かと考えた。
- メンタルヘルスの治療では、自分の心の問題を具現化して話す必要があり、コミュニケーションの中で解決となる。その国の言葉が出来ないのであれば、医療的な治療での解決は難しい。自国に戻るしかない。
- 県では、メンタルヘルスの問題を考える国籍ごとのグループを作るように促し、活動の助成や補助を行うことは出来るかもしれない。

(李委員)

- 国ではなく言語に関係がある。言語が分かると深い会話出来る。

(柳委員)

- 日本人の中にも、ギャンブル依存症やアルコール依存症の人がいるが、立ち直るために、同じような境遇の人が集まって、思いを共有するグループが次のステップに行くための大事なポイントになっている。メンタルの状況に応じて、同じような経験や思いを共有できる人との出会いが大切。外国人の場合、意思疎通をするために言語が必要。共通の言語のグループを作り、話すことで、解決に繋がることあるのではないか。

(韓委員)

- ピアサポーターは治療ではない。治療がいったん終わって、また戻らないように、同じ経験を持っている人たちが集まるものである。今の話は、治療が必要だが、言語を分かってくれないという話である。

(事務局)

- 精神科で多言語対応出来る人を増やすということが究極論のように思われるが、そうすると県の範疇をこえてしまう。また、ボランティアである医療通訳者にそこまでお願いすることは難しい。

(韓委員)

- 2世、3世の人たちは日本語が出来る。どちらかと言うとマイノリティの中での孤立や孤独で、メンタルヘルスケアになる可能性が高い。本国があり、環境が変わり、慣れない、友達がいないといった孤立の問題にあ

たつては、コミュニケーションをするしかない。

(事務局)

- ・ バ委員の話にあるように、交流のイベントになるのではないかな。問題に陥らないために、何をするかという考え方があるかもしれない。

(韓委員)

- ・ 医療・治療・メンタルケアではなく、日常的に色々な人とコミュニケーションがとれるコミュニティが沢山あればよいと思う。

(事務局)

- ・ 県として、楽しく、安心して暮らしてもらうためには、病気の人をサポートも必要であるが、なる前に何とか出来たらという気持ちがある。

(バ委員)

- ・ 外国人は住んでいる地域でのイベントを知らないことがある。町を歩いて知ることがある。イベントは多いが、情報が届いていない。

(事務局)

- ・ バ委員の話は、単なる告知の問題か、自治会に入れてもらえないという問題かもしれない。自治会・町内会に入れば、情報が入ってくる。

(韓委員)

- ・ 情報を能動的に取らない人がいる。関心がない人たちにどのようにアプローチするのかという話と、知っても来ない人たちをどう来るようにするのかという話がある。もう少しポイントを絞ったらよいと思う。

(柳委員長)

- ・ 9期または10期で自治会の参加について提言した委員がいた。過去の提言を見て、バ委員の考えに近い内容があるのか、今回はどこにポイントを絞って、どこを一番提言したいのかについて考えるとよい。

(韓委員)

- ・ ターゲットを具体化したシナリオを書いた方がよいかもしれない。例えば、平日9時から18時まで働いている人が、週末は子どもを連れてどこか行きたいと思うが、あまり自分のコミュニティがなく、知らない。そのような人たちにどのように情報を届けるのか。また、多くの人は誘っても行かないが、どうすればよいのかなど。

(柳委員長)

- ・ 繋がりた^{つな}いと思^{おも}った人^{ひと}たちが参加^{さんか}できる場^ばが日常^{にちじょう}的^{てき}にあるかという話^{はなし}ではないか。交流^{こうりゅう}が生ま^うれ、自分^{じぶん}の思^{おも}いの丈^{ただ}を話^{はな}すことが出来^{でき}る繋^{つな}がり、自分^{じぶん}の居場所^{いばしょ}として機能^{きのう}するかどうかという話^{はなし}が、他の提言^{ていげん}に繋^{つな}がる。

(バ委員)

- ・ 県^{けん}や区^くのイベントはあるが、何^{なに}をしているのかあまり理解^{りかい}出来^{でき}ていない。

(李委員)

- ・ 文化^{ぶんか}の問題^{もんだい}もある。例^{たと}え^えば、私^{わたし}は英語^{えいご}を使用^{しよう}したとき^{とき}は深^{ふか}い話^{はなし}が出来^{でき}るが、日本人^{にほんじん}の日本語^{にほんご}のイベントに参加^{さんか}した際^{さい}には、出来^{でき}ない。それは言語^{げんご}ではなく、雰囲気^{ふんいき}の問題^{もんだい}。日本人^{にほんじん}は深^{ふか}い話^{はなし}をあまりし^しない。

(韓委員)

- ・ そのよう^{よう}には思^{おも}わないが、日本人^{にほんじん}のコミュニティ^{もんだい}の問題^{もんだい}かもしれない。ど^どのよう^{よう}な人^{ひと}たちと付^つき合^あっているのか、ど^どのよう^{よう}な場^ばでその人^{ひと}と会^あったのかという問題^{もんだい}で、言語^{げんご}の問題^{もんだい}だけではない。

(バ委員)

- ・ 交流^{こうりゅう}に関^{かん}してはKSGG、かなファンにヒアリング^{おこな}を行^{おこな}うとよい。

(柳委員長)

- ・ 交流^{こうりゅう}イベントをど^どのよう^{よう}に実施^{じっし}し、ど^どのよう^{よう}な現^{げん}状^{じょう}と課題^{かだい}であるかについてヒアリング^かすることは可能^{かのう}ではないか。

(事務局)

- ・ かなファンを実施^{じっし}する国際課^{こくさいか}、運営事業^{うんえいじぎょう}者^{しや}等^なに話^{はなし}を聞^きくことは可能^{かのう}かもしれない。

ウ 兪委員^{ゆ い いん}の提言^{ていげん}構想^{こうそう}メモについて

(兪委員)

- ・ 在県^{ざいけん}外国^{がいこく}人^{じん}等^{とう}特別募集^{とくべつぼしゅう}枠^{わく}（在県^{ざいけん}枠^{わく}）について、現^{げん}状^{じょう}では、出願^{しゅつがん}者^{しや}数^{すう}が多^{おほ}く、不^ふ合格^{ごうかく}になる人^{ひと}が増^ふえている。

(柳委員長)

- ・ 在県^{ざいけん}枠^{わく}がある学校^{がっこう}では、ま^{なん}とめ^{にん}て何^に人^にか^が入^に学^{ゆう}するた^めめ、学^{がく}生^{せい}同^{どう}士^しが相談^{そうだん}出来^{でき}るが、枠^{わく}に入^{はい}らなかつた学^{がく}生^{せい}は様^{さま}々^ざな学^が校^{こう}に進^{しん}学^{がく}し、周^{まわ}りの日本人^{にほんじん}の生徒^{せいと}から心^{こころ}無^ない発^{はつ}言^{げん}等^{とう}があるという現^{げん}状^{じょう}も聞^きいた。そうしたし^{しん}が^がく^くご^ごの^{じょうきよう}状^{ふく}況^とを含^{くわ}めるか^はは問^{はなし}わ^うず、詳^{けい}しく話^いを伺^いい、ど^どのよう^{よう}な経^{けい}緯^い

で人数が変わったのか含め、高橋先生にヒアリング出来ると良い。

(愈委員)

- 日本に来たばかりの人は、日本語力が足りず、入学が難しい。また、学力がないため入れない人もいます。日本に来て1～2年の人と、5～6年の人とは、日本語力が異なる。

(柳委員長)

- 前回もお伝えしたが、県民会議で提言を出し、現場の先生も同じように求めて、3年から6年になった経緯がある。専門家から話を聞いた上で、県民会議としてどうするか考える必要がある。外国につながる子どもたちが出来るだけ高校に進学出来る体制を整えていきたいということが最終の目標となる。ただ、受験であるため、競争は必ず生まれてくる。

(愈委員)

- 在県枠は、外国人は日本語が上手くないことを理由に作っているが、小学校から日本に来ているような、日本語が上手くなっている子どもも一緒にテストを受けることはよいのか。

(柳委員長)

- 以前 蔣委員もおっしゃっていたが、日常生活と学習の日本語は、習得にかかる年数が異なる。日本語が伸びるまでの年数などが基準となっていて決まっているため、内容については確認が必要であると思う。

エ まとめ

(柳委員長)

- 教育については、高橋先生に話を聞く。韓委員の提言については、災害を担当する課等にヒアリング出来ればよい。バ委員の提言については、かなファンにヒアリング可能か、事務局より聞いてほしい。李委員の提言については、どこをターゲットにして提言するのかを考えてもらう。互助会を作る場合、県に対して補助やサポートをしてほしいという形になれば、提言の相手方は県になると思う。

3 全体会議

ア 生活向上部会について

りゅういんちょう
(柳委員長)

- ・ 教育については、在県枠等が関わるため、高橋先生に話を伺いたい。
- ・ 倉橋委員の高齢者の件については、12期の提言を踏まえ作成予定。
- ・ バ委員の提言については、イベント参加の機会増加について、焦点を絞り作成したい。かなファンに可能であればヒアリングしたい。
- ・ 韓委員の提言については、県の災害担当課にヒアリングしたい。
- ・ 李委員の提言については、県として補助可能かを含め、作成したい。

イ 情報部会について (事務局)

- ・ 情報部会は、前回から教育と生活オリエンテーションのテーマの2つに分けた。生活オリエンテーションの中には、防災が含まれる。
 - ・ 生活オリエンテーションについては、県が全域に共通する内容を作り、市町村別の内容については、市町村に説明を求める。
 - ・ 防災については、オリエンテーションを通じて周知したい。方法はオンラインが主となるが、紙での周知も行いたい。新たな周知手段として、県民会議のメンバーが情報発信していくのがよいという意見も出た。懇話会の藤浪先生、菊池先生、小川先生、稲垣先生にお話を伺いたい。
- りゅういんちょう
(柳委員長)
- ・ 各部署や現場等へのヒアリングに、ぜひ積極的に参加してほしい。

ウ その他 (柳委員長)

- ・ あーすフェスタの実行委員会に県民会議が入っていることから、ブースに関する協力依頼があった。

4 閉会 (事務局)

- ・ 次回の会議は12月、懇話会委員が出席する予定であることを伝えた。
- ・ 第9回となる3月には、一般の方も参加するオープン会議を実施する予定であることを伝えた。また、オープン会議の後に話し合う機会を作るため、第10回の会議を追加する予定であることも伝えた。